

戦後80年

# いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

## 第2回 千葉空襲の記憶

ひびよし  
日暮 淑さん 昭和2年生まれ

私は、旧豊住村(現成田市)の北羽鳥に生まれました。学校の先生になるため、千葉師範学校女子部(今の千葉大学教育学部の前身で、JR千葉駅近くにあった)に入学し、2年生の時のことです。昭和20(1945)年6月10日は、後に「千葉空襲」と言われ、生涯忘れることのできない日となってしまいました。

千葉は、東京に向かうB29の通り道とと思っていましたが、この日は千葉市が標的にされました。

### 学校工場で犠牲になった友人たち

当時、私たちの学校は「学校工場」という、飛行機のエンジンを作る工場となっていて、1日7時間ずつ3交代で機械を休まず動かし、夜も昼も工場で油まみれになり、手にたくさん鉄くずが刺さっても、1ミリメートルの100分の1の誤差も許されない厳しい作業に一生懸命取り組んでいました。

深夜作業を終わらせた私たちのグループが遅い朝食を済ませて、ホッとしている時でした。「ウーッ ウーッ」「敵の飛行機が来た!」という空襲警報がいきなり鳴り響き、ラジオの放送が「房総半島を北上しつつあり!」と告げました。その放送が終わらないうちに、B29は私たちの頭の上に飛んできていました。私たちは防空壕に走りましたが、ある先生が「消火用具も持たないで、壕に入る者があるか!」と一喝しました。当時、上司の命令には絶対服従だったため、慌てて消火用のバケツなどを取りに走りました。「シールシール、ヒュー ヒュー ヒュー ドカン」という聞き



日暮さんの体験を紙芝居にした「ねむの花に祈る」の一場面

慣れない音に私たちは一瞬立ち止まり、うずくまり、抱き合って伏せました。

もうもうたる土煙が収まり、周りが明るくなったところ、お互いの名を呼び合い、命のあることを確認しました。図書館と講堂、2階建ての寄宿舍という大きな3つの建物の間にいたおかげで無事でしたが、あと5メートルも進んでいたら完全に建物の下でした。目の前の体育館はぐちゃぐちゃにつぶれていて、その先にあった運動場が丸見えでした。運動場には、10メートルくらいもある、すり鉢状の大きな穴がいくつも開いていました。B29から落とされた爆弾の跡です。その穴の近くには、点々と……。友達が倒れていました。一度は防空壕まで行ったのに、先生の一言で引き返したため、友達は尊い命を落としてしまいました。爆弾の破片で、足が、手が、頭が……。一声もなく逝った友達。「痛い、痛い。お母さん」とうめく友達。本当に地獄絵でした。壕に滑り込んだ人。壕を目の前にして爆弾の破片で足をえぐり取られた人。顔面を打ち砕かれた人。出血多量で息絶えた人。建物の2階の搬出物を取りに階段を駆け上ろうと、一番先に踏み出した人は即死。2番目、3番目の人は、手や足、お尻に破片が当たり大けが。4番目の人は無傷でした。運命の分かれ道としか言いようのない数分でした。

「ねむの花が咲けば、夏休み。家に帰れる」と楽しみにしていた友達。そのねむの花が咲くのを待たずに散った若かりし友。再び戦争が起きたら——。友達は何のために犠牲になったのか。二度と戦争はしないで、平和をつないでほしいです。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和6年9月15日号 No.1515



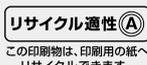
成田市のホームページ  
<https://www.city.narita.chiba.jp>

\*QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

\*本紙は9月5日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

### 編集後記

だんだんと日没も早くなり、秋の訪れを感じるようになりました。秋といえば、おいしい旬な食べ物盛りだくさん。成田の特産品であるサツマイモもその一つです。白米と一緒に炊き上げたサツマイモご飯や、油でさくっと揚げた天ぷら、焼いて甘い蜜をからめた大学芋など、主食や副菜、おやつまでどんな形でも楽しめる、バリエーション豊富で栄養満点な万能食材です。旬なこの時期にいろいろな種類のサツマイモ料理に挑戦して、味覚の秋を楽しみたいですね。



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。